青年訪米親善使節団報告書

1992年 2 月21日～ 3 月 1 日

Takamatsu International Association
財団法人 高松市国際交流協会

次代を担う青年達に期待する

財団法人高松市国際交流協会
理事長　三　野　　博

最近の社会経済における国際化の進展は、地域社会にも大きな影響を与えるようになってきております。

さらに国際交流は、これまでの政治、経済を中心とした面だけでなく、人、情報、文化、スポーツなどのさまざまな面で交流を深めております。そして、これらの分野において、中心的な役割を果たすのは、地域に住んでいる一人ひとりの市民の方々の交流であります。

高松市における地域に根ざした市民レベルの国際交流を進めることを趣旨として、1990年８月に設立された財団法人高松市国際交流協会では、「世界に開かれた都市・高松」づくりを進めるため、さまざまな国際交流事業を実施しております。

このたび、次代を担う青年達が海外においてホームステイや青年等との交流を行い、国際理解や豊かな国際感覚を養うことを目的として、青年海外親善使節団を姉妹都市のアメリカ合衆国セント・ピータースバーグ市等へ派遣いたしました。

派遣された皆さんは、姉妹都市等において温かい歓迎を受け、市役所や市の福祉施設、スポーツ施設等を見学するとともに、短い期間ながらホストファミリーとの生活の中で、心のふれ合いを持ち、また、青年や市民との交流によって、外国文化、習慣等を学ぶなど、相互理解と友好親善に大きな成果があったものと確信いたしております。

皆さんは今回の貴重な経験を生かし、国際性を身につけた青年として、今後の高松市の国際化に、また、世界の平和に大いに貢献されますよう期待いたします。

最後になりましたが、今回の派遣につきましてご支援いただきましたセント・ピータースバーグ市長をはじめ、両市の国際交流関係者、ホストファミリーの皆様、その他多くの皆様に対しまして、厚くお礼申しあげます。

目　　次

■ 団員名簿 …… 1

■ 日　　程 …… 2

■ 行程日記 …… 4

■ 団員報告

・国際交流の報告　団　長　原田　義信　14

・日本人として何をすべきか　請川　勘次　16

・I Love America!　内海志穂子　18

・HERE'S AMERICA　上　ゆかり　20

・青年訪米親善使節派遣事業に参加して　唐渡　進　22

・「国際化」への第一歩　工代裕美子　24

・セント・ピータースバーグで見た
　本当に強くてやさしいアメリカ　河野　直子　28

・青年訪米親善使節団に参加して　十鳥　真理　30

・訪米親善使節団員としての旅を終えて　福田　有紀　32

・青年の海外派遣事業に思うこと　事務局　加藤　浩三　34

■ ホームステイ日記 …… 36

■ エピソード …… 45

■ お世話になった方々 …… 47

■ 団員名簿

（団員50音順）

役職	氏名	性別	年齢	住所	勤務先等
団長	原田義信（ハラダヨシノブ）	男	26	高松市中山町170	高松市青年団体連絡協議会副会長 高松市西部農協 TEL 81－2181
団員	請川勘次（ウケガワカンジ）	男	26	高松市東浜町一丁目3－4コート片原町102号	㈱富士通香川システムエンジニアリング TEL 22－5161
〃	内海志穂子（ウツミシホコ）	女	28	高松市今里町250 －4	高松簡易裁判所調停センター TEL 51－1531
〃	上ゆかり（カミ）	女	24	高松市木太町7区3200－12	㈱マキタ TEL 21－5501
〃	唐渡進（カラトススム）	男	28	高松市鬼無町藤井249	緑化建設事業協同組合 TEL 82－6431
〃	工代裕美子（クダイユミコ）	女	28	高松市桜町二丁目7－31－114	日本銀行高松支店 TEL 25－1111
〃	河野直子（コウノナオコ）	女	25	高松市紫雲町1－17	サンコー㈱ TEL 21－0037
〃	十鳥真理（ジュウトリマリ）	女	23	高松市鬼無町佐藤69－3	西日本放送㈱ TEL 39－3911
〃	福田有紀（フクダユキ）	女	24	高松市香西東町642 －8	㈱四国新聞社 TEL 33－1111
事務局	加藤浩三（カトウコウゾウ）	男	31	高松市一宮町273	高松市教育委員会社会教育課 TEL 39－2633

■ 日　程

日次	月　日（曜）	地　名	現地時間	交通機関	日　　程
1	2月21日（金）	高　松　発 大　阪　着 大　阪　発	13：40 14：25 18：45	ＡＮＫ470 ＵＡ810	高松→大阪 出国手続き 大阪→ロサンゼルス
					日付変更線
		サンフランシスコ着 サンフランシスコ発 ロサンゼルス着	11：00 13：00 14：15 15：00	 専用バス	入国手続き ロサンゼルス視察見学 マリーナ・デル・レイ、リトルトーキョー等 （ロサンゼルス泊）
2	2月22日（土）	ロサンゼルス発 タンパ着 タンパ発 セント・ピータースバーグ着	8：30 15：50 16：00 16：30	ＤＬ808 専用バス	ロサンゼルス→タンパ タンパ→セント・ピータスバーグ ホームステイ宅へ （セント・ピータースバーグ：ホームステイ）
3	2月23日（日）	セント・ピータースバーグ			ホストファミリーとの交流 （セント・ピータースバーグ：ホームステイ）
4	2月24日（月）	セント・ピータースバーグ	9：10 10：35 18：20	専用バス	セント・ピータースバーグ市役所表敬訪問 セント・ピータースバーグ視察見学 サンコースト・ドーム、老人ホーム、 ピア、ダリ美術館、 セント・ピータースバーグ・ビーチ 交歓会 （セント・ピータースバーグ：ホームステイ）
5	2月25日（火）	セント・ピータースバーグ発 オーランド着 オーランド発 アトランタ着	8：50 11：30 18：25 19：30	専用バス ＤＬ164	セント・ピータースバーグ→オーランド ディズニーワールド見学 オーランド→アトランタ （アトランタ泊）

日次	月　日（曜）	地　名	現地時間	交通機関	日　　程
6	2月26日（水）	アトランタ		専用バス	アトランタ視察見学 スワン・ハウス、ＣＮＮ、 ストーン・マウンテン、プランテーション、 キング牧師記念館等 （アトランタ泊）
7	2月27日（木）	アトランタ発 ニューヨーク着	8：48 10：45 13：00	ＤＬ716 専用バス	アトランタ→ニューヨークへ ニューヨーク視察見学 自由の女神、国連本部、 ヘリコプターツアー ミュージカル（ミスサイゴン） （ニューヨーク泊）
8	2月28日（金）	ニューヨーク	9：00	専用バス	ニューヨーク視察見学 ロックフェラー・センター、世界貿易センタービル、 ウォール街（証券取引所）、メトロポリタン美術館、 5番街、エンパイアステートビル （ニューヨーク泊）
9	2月29日（土）	ニューヨーク発	11：15	ＵＡ803	出国手続き ニューヨーク→成田 （機中泊）
10	3月1日（日）	成　田　着 成　田　発 羽　田　発 高　松　着	15：10 16：00 18：40 20：00	リムジンバス ＪＡＳ395	日付変更線 入国手続き 成田→羽田 羽田→高松

ANK＝エアーニッポン　　UA＝ユナイテッド航空　　DL＝デルタ航空
JAS＝日本エアーシステム

■ 行程日記

2月21日（金）　　記録担当・河　野　直　子

□12：40　高松空港集合／結団式
- 曇り＆雪のちらつく寒い日。ＡＮＡカウンター前に全員集合。国際交流課の井上係長、藤本さん、去年のアメリカ班長・南さん、フランス班長・黒川さんが見送りにきてくれる。
- 搭乗口前で結団式。その後ＡＮＫ470便で高松発。

□18：45　大阪空港から出発
- 14：25　大阪着。国際交流課の小松課長が出迎え・見送りにきてくれる。
- 18：45　いよいよＵＡ810便にてアメリカへ向け出発。

（日付変更線）

□9：00　機内にて朝食
- ここで日本時間からアメリカ西部時間に変更。日本ではまだ真夜中の２時。朝食はマーマレードパン、オレンジジュース、フルーツ。

□11：00　サンフランシスコ到着～ロサンゼルスに移動
- 入国手続き。13：00にはロサンゼルスに向け出発。

□14：15　Ｌ．Ａ．着
- 天候、晴れ。ＪＴＢの門松さんが出迎えてくれて、ロス見学開始！
- お昼はバスの中でサンドイッチ。

□15：00　マリーナ・デル・レイ
- マリーナ・デル・レイは美しいヨットハーバー。海に6000隻、陸に3000隻のヨットがあり、すごい！

□15：30　サンタモニカビーチ
- きれい！でもホームレスの人も見ちゃった。

□17：15　リトルトーキョー
- スーパー等見学。スーパーには日本食のありとあらゆるものがあった。

□18：30　ハリウッド・ルーズベルトホテル着
- 市内見学を終え、ホテルに到着。
- 19：30からホテルでディナー。お肉がとても固い。

□20：50　チャイニーズ・シアター見学
- ホテルのすぐ近くのチャイニーズ・シアターを見学。写真をとったり、スターの星型を探して街をぶらぶらする。

□21：30頃
- 各自ホテルの部屋に戻る。

結　団　式

マリーナ・デル・レイにて

2月22日（土）　　記録担当・十　鳥　真　理

□6：00　起床・ホテル発

- 5：00　モーニング・コール、5：50にロビー集合。
- 6：00　空港に向け出発。バスの中で朝食。お弁当はカリフォルニア米ののり弁当。

□8：30　L．A．発

- タンパに向け　TAKE　OFF!

□9：00　機内にて朝食

- またまた朝食。よく食べること！よく食べること！　みんな元気。（デルタの機内食は評判が良かった）

□15：50　タンパ着

- キャシーさん、安希子さんが出迎えてくれる。やっと会えて嬉しかった。
- バスでセント・ピータースバーグに向かう。

□16：30　セント・ピータースバーグ着・ホストファミリーと対面

- セント・ピータースバーグのタイロン・ガーデンズ・センターに到着。いよいよホストファミリーと対面。
- 各自、別れてホストファミリー宅へ。

ホストファミリー宅での模様は各メンバーの
『ホームステイ日記』を参照。

◀　ピア

セ市のシンボル「ペリカン」　▶

2月24日（月）　　記録担当・工　代　裕美子

□8：45　タイロン・ガーデンズ・センター集合・出発

- 8：30　団員達がホストファミリーに送られて集合。
- 8：45　市役所に向け出発。バスの中で各自表敬訪問時の自己紹介を発表、キャシーさんにチェックしていただく。

□9：10　セント・ピータースバーグ市役所表敬訪問

- 玄関で国際交流担当のバージニア・ローエルさんに出迎えていただく。気さくで親しみやすい方。
- 残念ながら市長は急用で不在。副市長のコニー・コーン氏（女性）の案内で市長室へ。
- 原田団長、脇市長のメッセージをコーン副市長に手渡す。コーン副市長からはセント・ピータースバーグ市の市章を全員にいただく。
- 市議会議場を見学。市議席に座らせていただき、高い席から副市長に次々と質問する。
- 最後に市長あての記念品『秋篠』（木目込み人形）を贈呈。
- 10：15　市役所を後にする。内海さんは節子さんの案内で裁判所見学コースへ。

□10：35　フロリダ・サンコースト・ドーム見学

- サンコースト・ドームは1990年、総工費約179億円を投じて建設された全天候型ドーム球場。その雄大さと施設の素晴らしさに全員息を呑む。もっとも、誘致する野球チームは未だ決まっておらず、野球のゲームさえ一度も行われたことがないとか。現在は、バスケ、アメフト等何でも受入れているが、稼働率は3分の1以下に止まり、年間約2億円の赤字計上を余儀無くされている由。一日も早くドームで念願のBASE BALL GAMEが実現することを祈る！

□11：35　パームショアーズ・リタイアメントホーム見学

- 大きくて、とてもステキな老人ホーム。ここには現在240人のご老人（62歳以上）が生活しており、ケアの必要度によって3段階に分かれている。高級感のある施設で、ある程度成功した人でないと入れないそうだ。
- お会いした方々は皆さん私達を好意的に迎えてくださった。帰り際に、『優しい笑顔の人達に幸あれ』の想いを託し、奉公さん人形（20個）を贈る。

□13：05　ピア着・昼食

- ピアに到着。ここで内海さん、節子さんと合流。
- レストランで昼食。メニューはハンバーガーとポテトチップス。

□14：30　ダリ美術館見学

- ダリ美術館を見学。美術館入口近くには、姉妹都市提携三十周年を記念して脇市長が植樹された樫の木が、順調に育っていた。一同その前で記念撮影。

□15：30　ドン・セサー・ホテル着

- セント・ピータースバーグビーチ見学のためドン・セサー・ホテルを訪れる。しかし、評判のビーチを前にして雨にたたられる。残念・・・。でもここのアイスクリームはGOOD！

セント・ピータースバーグ市役所にて
脇市長のメッセージを手渡す

パームショアーズ・リタイアメントホーム

□16：30　ミドル・カレッジ着～交歓会準備

・交歓会会場であるミドル・カレッジに到着。交歓会準備に取り掛かる。リハーサル。

・この間、酒生さんご夫妻、安希子さん等、日系の方々が食事の準備を進めて下さる。キャシーさんのご主人も応援に。

□18：20　交歓会スタート

［プログラム］

18：20　歌「花」
「You are my sunshine」
キャシーさんによる開会の挨拶
乾杯（唐渡さん「カンパイ！」）

18：30　飲食・歓談

19：00　団長挨拶
自己紹介（団員）
ゲーム①「二人羽織」
ゲーム②「豆運び」
ゲーム③「輪ゴム運び」
予想以上にウケた。
全ホストファミリーがゲームに参加し、正に和気あいあいの雰囲気。

高松紹介（団員）
歌「アニバーサリー」
「My Bonnie」
途中で涙に声が詰まってしまう人続出。
ホストファミリーもまた涙…。私達にとって、今日は忘れることのできない記念日。

踊り「一合まいた」
ホストファミリーも加わり輪になって踊る。アンコールでもう一回！
団扇・手拭いはプレゼント。

20：00　高松市職員・木村氏（セ市滞在）の挨拶

20：18　歌「ほたるの光」

20：20　大成功のうちに終了

□解　散

・ホストファミリーと帰路に。そして、それぞれのホームステイ最後の夜…。

◀　オープニングの歌「花」

好評だったゲーム「二人羽織」　▶

2月25日（火）　　記録担当・内　海　志穂子

□8：50　タイロン・ガーデンズ・センター集合・出発

- 8：30　団員達がホストファミリーに送られて集合。ここで家族とのお別れの挨拶。たいへんお世話になったことに対するお礼など、涙があふれて仕方なかった。
- 8：50　団員全員バスに乗り込み、ディズニーワールドへ向けて出発。酒生さんがお見送りして下さる。

□11：30　ディズニーワールド着

- オーランドにあるディズニーワールドに到着。あいにく天気は雨。
- スペースマウンテン、World of America、スモールワールドなどを楽しむ。
- 13：15　ホットドッグショップで昼食。その後、Shoppingしたりパレード見学したり。
- 15：45　正面GATE前に集合。バスに乗り込みオーランドの空港へ。

□18：25　オーランド発

- 16：50　空港着。出発までの間、各自ホットドッグを食べたりコーヒーを飲んだりして過ごす。
- 17：40　デルタ164 便に搭乗。ここでここまで色々とお世話して下さったキャシーさん、安希子さんとお別れ。
- 18：25　アトランタに向かって離陸。

□19：30　アトランタ着

- アトランタ・ハーツ・フィールド国際空港着。現地ガイドのよう子さんが出迎えてくれる。バスに乗ってホテルに向かう。

□20：25　デイズ・イン・レノックス・ホテルに到着

- 到着後、各自いったん部屋に入って荷物の整理など。
- 21：15　ホテル内のレストランで食事。メニューは限り無く生に近いステーキ。１名は謎の魚を食べる。

□23：30　ミーティング

- 突然ミーティングの召集。原田団長の部屋に集合し、これまでの行動の反省もこめて今後の団体行動の在り方について確認する。時間を正確に守ること、強調性を持つこと、まわりの全ての人に感謝の気持ちを持って接することなど、全員が意見を述べ合い、お互いに理解し合うよう努力することを確認した。
- 01：00　翌朝７時のモーニング・コールのある事を考え、ここで解散。

ディズニーワールドにて

2月26日（水）　　記録担当・唐　渡　　進

□9：00　起床・ホテル発
- 7：00　モーニング・コール
- 9：00　ホテルを後にする。

□9：30　スワン・ハウス見学
- スワン・ハウスに向かう。途中、バック・ヘンド高級住宅街を車中より見学。コカコーラオーナ宅、州知事官邸などを見る。
- スワン・ハウスではパラティアン復古調の建物を見学し、1930年代の裕福な家族の生活を見る。
- 10：40　スワン・ハウスを出る。

□11：10　ＣＮＮ着
- ニュースＴＶの24時間国際放送という情報革命を起こしたＣＮＮを視察し、ショッピング。
- 11：50　ＣＮＮを出る。

□12：30　ストーン・マウンテン・昼食
- ストーン・マウンテンを見学。岩盤に彫刻を彫ったアメリカ人の発想の偉大さに驚く。
- 当初はロープウェイに乗り、上まで登る予定であったが、あいにくトラブルでロープウェイが止まっていたため、予定を変更し、プランテーションを見学することにする。

□13：35　プランテーション見学
- 奴隷時代の古い屋敷を見学する。

□15：00　キング牧師記念館見学
- 公民権運動の先駆者であるマーチン・ルーサー・キング牧師の記念館を見学する。近くにあるキング牧師の生家も車中より見る。

□15：50　コカコーラ本社見学
- コカコーラ本社を見学。内部は見学者用に公開されており、同社の歴史や製造工程等を見ることが出来る。
- コカコーラ本社見学後はすぐ近くのレノックス・モールを見学し、ショッピング。
- 16：30　バスに集合。ホテルに向かう。

□18：00　夕食
- 中華料理店で食事。米国製中華料理を食べながら大盛り上がり大会。話に花が咲く。
- 19：00　各自の部屋に解散。

◀　ストーン・マウンテン

プランテーションにて　▶

2月27日（木）　　記録担当・請　川　勘　次

□6：40　起床・ホテル発

・6：30　ロビー集合。6：41　ホテル発。空港に向かう。

□8：48　アトランタ発

・デルタ716便にてニューヨークに向け出発。

□10：45　ＮＹ着～昼食

・ラガーディア空港着。快晴。ＪＴＢのバスで一路市内のレストランに向かう。街のあまりの汚さにはビックリ。

・11：30　レストランにて昼食。十鳥さん、ウェイトレスにコップの水を倒され、濡れてしまう。

□13：00　スタットンアイランドまで往復

・フェリーにてスタットンアイランドまで往復。目的は船上からのマンハッタン・自由の女神見学。デッキは風が強かったがみんなデッキに出ずっぱりで写真の撮りまくり。

□14：15　国連本部視察

・国連本部を見学。地下はギフトショップになっており、観光名所という感じ。なぜか日本人見学者が多い。

□15：30　ホテル着

・ラマダホテルに着く。ロビーの広さにびっくり。「これが超一流ホテルというやつか」と感心したが、部屋に入ってみると高松のホテルのほうがマシだった。

・16：10　ロビーに集合。これからヘリポートに出発する。

□17：15　ヘリよりＮＹ見物

・16：30　ヘリポートに着く。とても寒い。

・17：15　２台のヘリに分乗していよいよ飛び立つ。上空より黄昏前のニューヨークを見下ろす。絶景。セントラルパーク、マンハッタン、エンパイアステート、自由の女神といったニューヨークの全景が存分に楽しめた。その間約17分。

□18：20　夕食

・夕食は日本食レストラン『紅花』で鉄板焼。目の前で実演してくれるコックさんの手さばきに女性陣より歓声が上がる。

□20：00　ブロードウェー

・本日のハイライト、ブロードウェイにてミュージカルを見物。しかもプログラムは今注目の『ミス・サイゴン』（唐渡氏推薦）。みんな疲れて寝るのではと心配されたが、全景を通して寝ていたのは某唐渡氏だけであった。みんな真剣に舞台に見入っていた。特に女性はみんな大感激。

□23：15　ホテル着・解散

・ミュージカル終了後、タクシーに分乗してホテルに帰る。タクシーを拾う際、グループが二つに分かれてお互い心配する一幕もあったが、無事ホテルに帰り着く。

フェリーにて

国連本部

2月28日（金）　　記録担当・上　　ゆかり

□9：00　ホテル発
・8：50　メインロビーに集合。9：00　バスに乗り込む。気温－5度。風が冷たい。

□9：12　ロックフェラーセンター着
・日本のＴＶでよく中継されるロックフェラーセンターでしばしバスを下りる。各国の国旗が色鮮やかに風になびいていた。

□10：05　世界貿易センタービル見学
・107階という驚異的な高さまで登る。

□11：03　ＮＹ証券取引所見学
・オプションとして組み込んだ全員待望のN.Y.S.E 。集合まで時間があったので記念撮影。（初めて証券取引が行われたという記念樹の前、ジョージ・ワシントンが演説したという建物の前etc.）
・建物の中では取引される場所を目の前にする事ができ、とても感激した。ギフトショップもあり、みんなおみやげをたくさん買っていた。

□12：35　昼食
・レストランCHARLIE で昼食。メニューはステーキとバイキングのサラダ。ビールとコーラが飲み放題。

□14：45　メトロポリタン美術館見学
・バスで市内を見学しながらメトロポリタン美術館に向かう。途中、ハーレムではバスに石を投げられる。
・15：40までメトロポリタン美術館の中を色々と見学。

□16：00　５番街でショッピング
・５番街に到着。ティファニー前で解散。各自ショッピング開始。
・18：15　思い思いの袋を手にティファニー前に集合。タクシーに分乗し、ホテルに帰る。

□19：00　夕食
・ホテル地下のレストランで夕食。メニューはホワイトソースのパスタ。

□20：30　エンパイアステートビルまで散歩
・ＮＹの夜景を見に、エンパイアステートビルまで歩いていく。

□22：00　BAR で打ち上げ
・エンパイアステートビルからの帰り道でみつけたBAR で最後の夜に乾杯!!
・23：30　各自、部屋に戻って荷作り。

ニューヨーク証券取引所前にて

５番街でショッピング

2月29日（土）～3月1日（日）

記録担当・福　田　有　紀

□7：50　ホテル発

・－3.9 度。すごく寒くて一同びっくりしつつホテルを出発。

□8：30　ニューアーク空港着／離陸

・8：30　空港着。前日『ニューアーク空港』と聞いて免税店は小さいと覚悟していたものの……小さすぎる!!Kiosk よりも小さいではないか！と一同ワナワナ・・・しかしそれにめげてはならず、最後のおみやげをしっかり（？）買い集めたのでした。

・11：15　離陸。

□13：30　機内にて夕食

・メニューはビーフ串焼きステーキソース、レーズンとアーモンド入りライス、西洋さやえんどうとにんじん。（ただし約1名除く・・）

□16：40　機内にて朝食

・朝食？　メニューはパンとジュース。

（日付変更線）

□13：30　機内にて昼食

・必然的に「フレッシュ・フルーツ・プレート・クロワッサンとヨーグルト」になる。でもこちらの方がさっぱりしているので有難かった。

□15：10　成田着（帰国）

・10日ぶりに日本の土を踏む。

□17：20　羽田に移動

・16：00　リムジンバスで羽田に向かう。バスに乗る直前、またもグループが二つに別れてしまい、大慌て。

・17：20　羽田空港に着く。搭乗時間まで時間があるのでお弁当を食べる。美味しかったけど、もうお腹一杯！

・18：40　高松に向け、離陸。

□20：00　高松空港着

・ようやく高松に帰ってくる。空港では小松課長をはじめ、井上係長、藤本さん、南さん、その他大勢の方々が迎えて下さる。

□20：30　解散

・原田団長から簡単な帰国の挨拶のあと、それぞれの待つ家庭に帰っていく。解散。

機　内　食

高松空港到着・みんなお帰りなさい

センピのピアをバックに“ハイ、ポーズ”

国際交流の報告

団長　原　田　義　信

私達、高松市青年訪米親善使節団10名は、2月21日から3月1日までの10日間、アメリカの姉妹都市フロリダ州セント・ピータースバーグ市を中心に、ロサンゼルス、アトランタ、ニューヨークと4つの都市をまわり、活発な国際交流を行ってきました。

まず姉妹都市セント・ピータースバーグ市では、ホームステイを中心に生のアメリカを体験して来ました。また3日目のセント・ピータースバーグ市役所表敬訪問では、高松市長のメッセージと木目込み人形を記念品として訪問しました。市役所では副市長のコニー・コーンさんと国際交流担当のバージニア・ローエルさんに迎えられました。私達は、市長室と議場を見学させていただき、議場では、私達は、議員席に座り、副市長に質疑応答までさせていただき良い経験が出来ました。私が議場で見つけたものは、ビデオカメラでした。なんとアメリカでは、議会中は、テレビ放映されるとのことでした。また議会に市民が参加して意見を述べることができるシステムもあり自由

ウォール街にて

な国アメリカだと思いました。またこのあと訪れた、リタイアメントホームでは、日本にはない老人の明るさを感じました。また日本の老人ホームとは違い、まるでアパートかマンションのような感じがするほどで、私達が住んでも不自由のない立派なものでした。

また、交歓会では、各自ホストファミリーを囲み、歌ありゲームあり、盆踊りありと全員で参加しながら和気あいあいと進み、時間を忘れるほどで大成功となりました。

今回ホームステイを通じ、また姉妹都市関係者のみなさまや多くの人達と語り合い、ふれ合い、本当の国際交流を感じました。私がアメリカで感じたことは、強いアメリカではなく助け合うアメリカ、自由なアメリカではなくマナーあるアメリカでした。これは日本も見習うべきものだと思います。

今回私達が協会事業として初めての高松市青年訪米親善使節団となったわけですが、今後もより多くの青年がアメリカを訪れ、国際交流を通じ、アメリカを知り、日本を伝え青年の友情の輪を広げてもらいたく思います。

団員みな、今回、アメリカ特にセント・ピータースバーグを訪れる機会が与えられたことに感謝しています。この体験を生かし、これから社会人として、一人の人間として、また今回のグループを通じて国際交流が深まるよう協力し、また青年達に伝え、より青年の友情の輪を広げたいと思います。最後にお世話になった多くの方々に心からお礼を申しあげて、私の報告とします。

エンパイアステートビルをバックに

日本人として何をすべきか

請　川　勘　次

最近の新聞記事やニュースを見ていると、日米関係は戦後最悪の時期を迎えているように感じる。

一般アメリカ国民が持っている、日本に対する感情を確かめたい――それが私の今回の訪米目的の一つであった。さらに言えば、是非とも日本の立場を説明し、またアメリカの事情も聞かせてもらいたいと考えていた。

そのためには、是非とも中流の（もしくはそれ以下の）一般アメリカ家庭を実見し、彼らの考えている事を知りたかった。今回お世話になったヨハンセン一家は、その意味で最適のホストファミリーだったように思う。私のそのような問い掛けに対して、彼らはよく聞いてくれたし、語ってくれた。（残念ながら英語力の拙さから50％は理解できなかったが・・）

ホームステイの２日目、ロイと二人で中古車センターに行った時の事。ロイが車を走らせながら窓の外を指差し、「あれを見ろ。」と言う。見ると看板に大きく“BUY AMERICAN”と書いてある。また、走る車に“REMEMBER PEARL HARBAR”と書いたステッカーが貼ってあるのも教えてくれた。その夜、夕食の時に私はロイとジェニーに質問してみた。「ほとんどのアメリカ国民は、アメリカの景気後退の原因は日本にあると考えているのか。」二人は即座にYES と答えた。ロイは「お互いにうまく理解し合えていないのは残念だ。これからの日米関係については悲観的に思っている。」と付け加えた。私は「日本が対米貿易を均衡にする努力は必要だ。しかしアメリカの経営者ももっと景気回復のための努力をするべきだ。」と答えた。もっともっと言いたいことはあったが、私の英語力ではこれ以上のことは言えなかった。

しかし本当に重要なのは、そういったうわべの議論、わかりきった一般論を交わすことではない。日本人として、彼らアメリカ人に溶け込み、言葉が充分通じないまでも、人間として真心の交流をすることだ。私の誠意は必ず彼らに通じたと思っている。

今の日米関係についてのマスコミの報道は、よく言われる事だが余りにも

ホテルにて交歓会のリハーサル

一部の出来事をセンセーショナルに取り上げているきらいがある。情報氾濫の時代と言われ、情報の選択が難しいと言われる昨今だが、実は巧妙かつ恣意的に選択された情報のみを受け取る事になってはいないだろうか。世論とは本来ボトムアップしていくものであって、メディアからトップダウンしてくるものであってはならない。日米関係、いや広く国際社会における日本の評価についても、所詮は市民レベルでの交流が結局は世論の形成へとつながるべきと考える。徒らに情報に振り回され、反日・嫌米の風潮に流されてはならない。

N. Y. ハーレム

その意味で、今回の親善使節団のような草の根レベルでの国際交流は今後益々必要になってくるだろう。交流とは相互理解である。お互いの文化・慣習・国民性の違いを認識し、違いを認めた上でお互いの立場を理解し合う事だと思う。それは相手を自国から見て異質なものと捉え、「リビジョナイズ」の名の元に自国の考えを押しつける事ではない。これから日本人の海外進出は特にビジネスの分野で益々盛んになると思うが、たとえビジネスであっても相手の立場を理解し、尊重するスタンスでなければ少なからぬ摩擦を引き起こし、反日感情を煽る事になりはしまいか。

地道な話だが、我々市民が、国際交流の重要性を認識し、世界の中の日本人として今何をすべきかを考え、行動すること。そのような意識を持った日本人が一人でも増えていくこと。それが今の日本に必要だと思う。

何をすべきか、どう動くのか――それは「対話」から始まると考える。

今回の訪米は、私にとって大変実り多いものとなった。素晴らしいアメリカの友人に知り会えたこと、現地のボランティアの日本人の方に親切にしていただいたこと、すべてが普通の海外旅行では体験することのできない、感動の連続であった。これからはこの貴重な体験を、決して無駄にすることなく、自分の立場で国際交流に貢献出来ることを考え、行動していきたい。

最後に私達の訪米を影から支えて下さった多くの方々――事務局を始め、前回訪米の先輩達、現地でお世話になったボランティアの方々、ＪＴＢさん、その他今回の使節団派遣に関わった全ての皆さんに厚くお礼を申し上げます。

そして何より、今回寝食を共にしたメンバーのみんなに感謝したい。皆さんの思いやり、親切、そして団結心は、少なからず私を人間的に成長させてくれたと思う。本当に有難うございました。

I Love America !

内　海　志穂子

幼い頃、砂場で遊ぶ度、深く穴を掘っては「このままどんどん掘り続けていったらアメリカの空が見える。」と信じていた。広大で豊かで世界中のエネルギーが集結している憧れの国――漠然と夢みていたアメリカに、本当に行ってきたことを思うと、あの興奮が蘇ってくる。

ハリウッドのスターたちの手形足形、国内で移動しても生じる時差、フロリダの輝く太陽、森の中の南部独特の大豪邸、活気あふれるマンハッタン、今、それらの写真の中に笑顔でおさまっている自分の姿をみて、遠かったアメリカが急に近くに感じられる。

最も思い出深いのはホームステイである。私のステイしたメリカン家は、ジェネラルエレクトリックカンパニーにお勤めのお父さん、図書館の館長をされているお母さん、そしてダリ美術館にお勤めのジェニファーの３人家族である。ジェニファーのお姉さんはニューヨークにお嫁に行っていて電話でお話をした。私の家と全く同じ家族構成で、ジェニファーとは同年代だったので、打ちとけて話し合えた。

たぬきみたいに大きい
ネコのジョーとジェニファー

仕事や勉強のこと、恋愛や結婚のこと、将来の夢、学生時代の思い出、旅行やファッションのこと、話は尽きず、私の下手な英語に一生懸命耳を傾け、またやさしい単語を選んで話してくれた。文化の全く違う遠い異国で育った２人も、理解し合おうという気持ちがあれば心が通じることを感じ、私はたいへんうれしかった。

今回の訪米に際し、私の個人テーマは、アメリカの裁判所を見学し、私と同じ仕事をする裁判所書記官と話をすること、賠審制がどのようなものか現実に見て

くることであった。そこで半日間、団体行動を離れ、セント・ピータースバーグ市内の地方裁判所を、通訳の節子さんと一緒に訪れた。

私の傍聴した民事事件は、同じ会社で働く女性同士の争いで出世争いのため卑劣な手段を使ったとして損害賠償を請求するという、いかにも現代のアメリカらしい事件だった。日本では裁判官に向かって熱弁をふるう弁護士も、ここでは陪審員に向かってまくしたてており、映画で観たとおりの光景であった。6人の陪審員の中には、ヘビメタ風もいれば、ヤンキー風もいて、少し不安になったが、選挙権をもつ人から無作為に選ぶのだから仕方がない。

ディズニーワールドで
Vサイン！

話をする機会を得た書記官は、いかにもキャリアを積んだという聡明な感じの女性で、やはり訴訟社会といわれるだけあって平和な田舎町でも事件数はたいへん多くとても忙しいと言っていた。

短い期間に、ホームステイ、裁判所見学、市役所など公的機関の訪問、西部、東部の各都市の視察と盛りだくさんの内容で、たいへん勉強になる旅だった。このすばらしい経験を未来の国際都市高松で生かしていきたいと思う。　最後に、お世話をして下さった市役所の皆さん、国際交流協会の方々、ともに友情をわかち合えた団員のみんなに心から感謝します。ありがとうございました。

ダリの絵のTシャツと
ダリのひげをつけて

HERE'S AMERICA

上　　ゆかり

あふれんばかりの思い出を胸に、アメリカから帰国した。特に、私にとっては初めてのホームステイ。タンパ空港から30分タンパ・ベイを両サイドに、フリーウェイを通りぬけセント・ピータースバーグに入り、ホストファミリーの待つ場所へ着く頃には、普段元気だけが取柄のこの私が、緊張の余りおとなしくなっていたのには、自分自身驚いていた。私のホストファミリーは、パーカーさん一家、息子さんのピエールも迎えに来てくれていた。対面式の後、みんなと離れてファミリーの家へ向かう。大きな期待と少しの不安が胸の中を交差してドキドキしていることを車の中で伝えると、"Don't worry!" と言って、抱きしめてくれた。

ドナルド・パーカーさんは、コンピュータ会社の社長、声が甘く透き通っていて優しい紳士、デニス・パーカーさんは、ヒルトンホテルの取締役営業部長、いつも笑顔を絶やさず、おもしろい事があると信じられないくらい大きな声で笑うアメリカ版肝っ玉母さん、2人は2年前に再婚している。とても素敵なご夫婦だった。そして、デニスさんの息子さんで23歳のピエール、6か月前まで海軍にいたピエールは、今カレッジでphysical scienceについて学んでいる。私はホームステイの3日間ずっと彼と一緒に過ごした。何一つとして通じない日本語、すべてが英語で始まり英語で終わる。日本にいる私の外国人のお友達は、幾らかの英単語とミックスした日本語英語で充分に気持ちが伝わる。ここではそうは行かない。でも、耳が慣れて来ると最初は聞き取れなかった英語も、徐々に理解できるようになってくるから不思議だ。下手な私の英語も一生懸命分かろうと努力してくれて嬉しかった。最初の夜、ママ手作りの夕食の後、ピエールと高校時代のお友達の家に行った。行く途中、私が「アメリカの人ってピストルを持ってるって言うけどピエールも持ってる？」って聞いたら「うん、もちろんさ。」と、車のダッシュボードに手を伸ばすので、「やっぱりここはアメリカだ……。」と恐さと本物を初めてみる興味半分で待っていたら、実は真っ赤な嘘だった。彼は、自分がダッシュボードに手を伸ばした時の私の顔がおもしろかったらしく、その後出会う全ての人にこの話を延々と繰り返す事になった。

日曜日のディナーは、私の作ったお好み焼きと肉じゃが……。結構上手にできました。

ピエールのお友達の家のドアをくぐると、そこにはアメリカ人の男の子が7人もいた。"Nice to meet you." 握手しただけなのに顔が赤くなった。チャーリーシーンそっくりのDARYL や、ミッキーロークそっくりのCHRIS 、自称ピーウィーハーマンのTIM 、大きな声で笑うMIKE、一番体格のいいBRETT 、TIM のお兄さんで髭をはやしたSCOTT 。みんな格好いい人ばっかり。ピエールってたくさんのお友達がいるのね。

"Nice to meet you, too."

ママは秘書付のセールスマネージャー、
ブランチのあと、オフィスを見せてくれました

ディスコやバーにも行った。結局、家に帰ったのは、午前2時を回っていた。

次の朝、ママとコーヒーを飲みながら庭を散歩した。歩きながら「昨日の夜は遅くなってごめんなさい。」って謝ったら、「ゆかりもピエールも20歳を越えた大人だから全然心配してないわ。それより、楽しかった？」と言われて「とっても!!」と、答えたら「GOOD!!ピエールは、ゆかりのことが大好きだからいろんな所へ連れて行ってくれるはずよ。今日もお昼からビーチバレーをしに一緒に行くっていっていたわ。その前に3人で朝食を食べに行きましょう。」と言って、ママの勤め先のホテルまで行った。食事の後、ママのオフィスも見せてもらった。

"Thank you for wonderful breakfast."

午後からは、ショッピングモールで買物の後、セント・ピータースバーグビーチでビーチバレー。私は見ているだけが途中からつまらなくなり、靴を脱いで波打ち際を散歩した。歩きながら貝殻を拾った。一つ一つの思い出を確かめるように。そして、一体どこまで続いているのかしら…この海岸線。ピエールが心配して追いかけて来てくれた。

夜は、私の作った"お好み焼"と"肉じゃが"をメインに夕食。特に、肉じゃがは、キャセロールが空っぽになった程だった。夕食の後は、ピエールとパットゴルフに行った。結果は、1ポイント差で私の勝ち。そしてその帰り道カラオケバーを見つけたのには笑った。

ホームステイ最後の夜、公式訪問・交歓会を終え帰宅した私は、パーカーさん一家とお別れの挨拶をしなければならなかった。「パパ、ママ、そしてピエール、3日間本当に有難うございました。」ここまで言うのが、精いっぱいだった。ママが言った。「必ずまたここに帰って来なさい。」パパもピエールもうなずいた。

"We miss you!"

パパとママが寝室に行ってからも、ピエールと私は、リビングでバスケットボールの試合を遅くまで見ていた。

"Thank you Pierre. I will never forget you." 部屋に戻る前、ピエールがオデコとホッペにキスをしてくれた。これからも、ずっとお友達でいようね。

お別れの朝、よく眠れなかった私の枕元にママがジュースを持って来てくれた。ママの瞳も潤んでいた。

日本に帰ってすぐママに電話をした。ディズニーワールドの話やブロードウェイのミュージカルが感激だったこと、ママもとっても喜んでくれた。そして先日、ママから手紙と写真がエアメールで送られてきた。確かに時が流れていた。写真の日付は半月前。短い間だったけど、本当に楽しかった。その写真を手に取りながら、まだまだ思い出に浸る日が続きそうなこの頃です。

私達の友情は永遠に不滅です……
ねっピエール!!

青年訪米親善使節派遣事業に参加して

唐渡　　進

私たちはこの2年間、東欧の崩壊のプロセスにはじまってベルリンの壁の崩落、そしてついにはソ連共産党の解散・連邦解体という激動のドラマをみせつけられました。このような時に、日米親善の事業に参画できたことに心より感謝いたします。

セント・ピータースバーグにおいては、キャシー・プランタムラさん、カニー・酒生さん、安希子・ウォールズさん達を中心にたいへんお世話になりました。心よくホームステイに受入れていただき、本当に楽しい時間を過ごすことができました。特に、交歓会においてはたくさんの方々に集まっていただいたうえに会場の斡旋、料理のセッティングまでお世話になりました。GAMEや出し物に積極的に参加していただき、地域社会や国際交流に貢献しようという見識の高さに驚かされました。もともとが移民の国であるアメリカでは、遠く離れた親や兄弟を頼るよりも身近な地域の人々同士で助け合おうというボランティア精神が強く、現在ではなんと総人口2億5000万人のうち、ボランティア人口は8000万人をこえるとのことです。例えば、ＩＢＭでは社員20万人のうち11万人がコミュニティのボランティアとして活躍しているそうです。これこそ、今の日本の若者に欠落しているものではないでしょうか。公共のために

ロックフェラーセンターの前で

働こうという熱意のなさには、救いがたいものがあります。それにしても、私たちが生まれる何十年もまえから遠く異国の地で生き抜いてきたキャシーさんたちには頭がさがる思いです。先人たちの努力に対して、思いをはせるとともに、国際交流の本当のあり方を学ぶことが出来ました。

N. Y.　証券取引所にて
レポーターと共に

私の働く緑化建設事業協同組合では、現在中国大連人材交流委員会より毎年15名の研修生を受入れ、造園の技術指導を行うとともに、大連市政府の要請により、都市緑化についてのコンサルティングや大連経済技術開発区の第二期工業団地造成に伴うリゾート施設の建設を実施しています。幸いなことに、91年度の研修生である宮杰生君はVISAを延長し、セント・ピータースバーグのエッカード大学への留学を希望しています。

21世紀のアジア・太平洋時代においては、世界最大の経済圏となる東アジア経済圏のリーダーとして、アメリカと中国とを仲介する日本の役割が最も重要です。

私は、微力ながら中国・大連のたくさんの友人たちとアメリカとを結ぶ草の根の人材交流の礎として、来たるべき21世紀を迎えたいと考えています。

N. Y. 国連前にて

「国際化」への第一歩

工　代　裕美子

世は正に“グローバル化”時代。そして、日本は今、冷戦後の新しい国際社会の中で様々な難しい選択を迫られている。戦後、最も近しい関係を築いてきたアメリカでは、経済の苦しみから、激しいまでのジャパン・バッシング旋風が吹荒れており、連日のようにこれを伝えるマスコミ報道がかまびすしい。ここまで問題を大きく考えなくても、高松の街を少し歩いてみれば一昔前では想像もつかない程多くの異邦の方々とすれ違う。単一民族の中で、目と目でものを言いながら生きていける時代は確実にその幕を閉じつつあるのだ。

私が、今回の青年訪米親善使節団員に応募したのは、こうした情勢の変化にも拘らず、今迄全く国際化されていなかった自分自身に初めの「第一歩」を踏出させるためだった。アメリカに飛び込んでアメリカを知りたい。日本を、そして自分を外から見つめ直し、これから何をすべきかを考えたい。そして、願わくば地球の裏側に生きる人達と心の絆を結びたい。幸いなことに、職場の方々、家族の理解を得ることができ、胸一杯の期待と不安を抱えて雪の舞う高松空港を後にした。

セント・ピータースバーグ市で私を迎えてくれたホストファミリーのクニッペン家は、爽やかなジェフ、ジョーン夫妻と可愛らしいジェナ（7才）、そして人形のようなカラー（1才半）の4人家族。市の南端、絵に描いたような美しい自然の中に彼らの家はあった。沢山の木々と芝生が辺りの景色を緑色に染め上げ、裏には白い鳥が遊ぶ大きな池が広がる。これが日本なら、とっくに○○公園として行政が管理に乗り出しているだろう。

かくして始まった初体験のホームステイ生活の中で私が何よりも驚いたのは、ホストファミリーがごく自然に私を受入れてくれたことだった。何の気負いもためらいもなく、初対面の“外国人”をまるで昔からの友人ででもあったかのように家族の一人に加えてしまう。自分達の生活のペースを決して乱すこともなく、しかも私には限りなく居心地の良い時間を過ごさせてくれた。さらに、2日目の夜、ジェフのご両親と3人兄弟のご一家が集まり、私のために賑やかなパーティを開いてくれたのだが、この人達との出会いがまた忘れられないものになった。とても陽気で気さくな人達で、私もすぐに打解けることができ、（辞書を片手に）話も弾んで楽しい一時を共にした。そし

とても可愛いカラーと一緒に

て思いがけないことに、翌日の交歓会の後、彼らは再度全員集合で私を待っていてくれたのだ。一人一人が、私と私の家族のために心の籠ったプレゼントを用意して…。別れ際、ジェフのお父さんの大きな胸に抱き締められ背中に沢山の人の手の温もりを感じた時、突き上げてくる熱いものをこらえながら私は遠い声を聞いた。「日本人は親切だ。でも僕はいつまでたってもガイジンのままだ。アメリカ人の受入れ方は違うから機会があれば是非一度行ってみればいい。」－今から6年前、奇しくもセント・ピータースバーグ市出身の留学生が漏らした言葉だ。人間は、国境を越えてこんなにも暖かい繋りを持つことができる。肌の色や使う言葉が違ってもそれは決して大きな障害にはならないことを確信した。本当の障害は、そうしたものが障害になると思い込んできた私達の心そのものではなかったのか。

ホームパーティの後で

確かに日本とアメリカは異質の慣習・国民性をもっている。クニッペン家では私が子供達のことを誉めると夫妻とも「有難う。可愛くて賢い本当に良い子達です。」と胸を張った。ここでは“謙遜”の美徳は通用しない。また、大変混みあっていた某文房具売場では、店員嬢が待っている客達に向かって「ごめんなさい。食事の時間が来たわ。」と自分の権利を主張し、もう一人の同僚を残して立ち去った。それから、ＮＹでは、寒かろうが、景気が低迷していようが、環境保護のためということで停車中にエンジンをかけている車から高額の罰金を取っていた。

異質のもの同士が本当に理解し合い、手を取り合っていくためには、まずお互いの違いをしっかりと知り、無用の誤解や歪みを解消することが先決だろう。それは口で言うほどたやすくはないかもしれない。しかし、驚き、或は傷つきながらも、理解し合いたいという前向きの姿勢でいる限り本物の心の絆を結ぶことが可能だということをこの旅で知った。

一人の力は小さいが、日本もアメリカもその一人の寄集まりなのだ。小さな力の積重ねがやがて諸問題解決の糸口に成り得ると信じたい。私も今回の貴重な経験を糧に、自分の歩幅で次の一歩へ進んでいこう。

最後に、派遣に際しご尽力下さった関係者の皆様、真の国際交流が何たるかを教えて下さった現地日系人の皆様、文字どおり“団結”してしまった団員のみんな、そして出会った全ての人達に厚く御礼申し上げます。

交歓会会場にて　ジェフ＆ジョーンと

セント・ピータースバーグで見た
本当に強くてやさしいアメリカ

河　野　直　子

今回の青年訪米使節団に応募した動機は、アメリカはどんな国なのだろうか、アメリカ人はどんな人なのだろうかという素直な疑問からでした。正直なことを言うとそれまでのアメリカに対する印象は、必ずしもいいことばかりではありませんでした。連日ニュースで流れてくるアメリカの情報といえば、ジャパンバッシング、ドラッグ、殺人事件など暗いものが中心です。そして何よりアメリカの印象を悪くしたのは、あるアメリカ人を我家にホームステイで受け入れた時でした。17才という若さもあってか「私はアメリカ人よ。」という言葉が口をついて出てくる子でした。すべての人がそうであるとは思えませんが、アメリカの強さをはきちがえた我ままな態度に、日本の悪いところはもちろんたくさんあると思いますが、アメリカもすべてが正しいわけでなく、自分を見直す必要があるのではないかという気持ちを持つようになりました。

こういう気持ちや、アメリカへの印象を一気に変えてくれたのが、セント・ピータースバーグの人々、そしてなにより私のホストファミリー、リンチさん一家でした。リンチさん一家はお父さんのマイク、お母さんのスザーン、そして３人の子供セーラ10才、シェーン８才、シェフ４才の５人家族でした。何より陽気で明るいマイク、頭がよくていろいろなことを話してくれるスザーン、日本が大好きで新聞でホストファミリー募集の広告を見つけて私をリンチ家に招いてくれたセーラ、野球チームのホープであるシェーン、お人形のようにかわいいシェフ。この家族と丸１日を過ごすことができた日曜日は、本当に貴重な１日でした。

午前中はダウンタウンにある大きな教会に出かけました。教会の日曜学校は初めてでしたが、リンチ家と離れて20才代のクラスに参加させてもらいました。ここで同年代のセント・ピータースバーグの人達と話す機会を得、日本のこと、言葉のことなどを話しました。皆さんとても気さくに話しかけてくれ、テレビで見

た「大草原の小さな家」のような世界でした。

午後からはショッピングに連れていってもらい、シアーズが中核となっているモールに行きました。一度家に帰ってから、セーラと2人で散歩に出かけました。学校のこと、遊びのことなど話しましたが、一番驚いたのはセーラが飛び級をしていることでした。飛び級をするのは、先生から親に打診があり、親が毎日の宿題をチェックしてサインをしなければならなかったり、学校にしばしば行って先生と話し合いをしなければならない等々の規則があり、その規則に同意する旨のサインをしてはじめて飛び級ができるそうです。車の運転免許も16才で取ることができるそうですが、これももし事故が起った場合の保障などのため親のサインが必要だということです。この話を聞いて、力のある人、才能のある人は早くからそれを伸ばすことのできる制度に驚き、また子供の教育を学校と親がサインという形で役割を明確にさせ、一緒になって行っているところに、日本ではその役割が曖昧なためにあまりに厳しい校則などの問題が起っているのではないかという疑問が湧き、逆に親にそれなりの意識がなければそれで終わり、といったアメリカの厳しい現実も見る思いでした。ワニがいるというクレソン湖や公園まで行って家に着いた時には、日が暮れかかって、心配したマイクが家の前で待っていてくれました。

家では夕食の用意がすっかり整い、スザーンのお母さんがレスト・ホームから来ていて一緒に食事となりました。レスト・ホームというのは、病院と老人ホームの中間のようなもので、自分で自分のことはある程度できるけれども、少しの介添えと医療が必要な人が入るところだそうです。スザーンのお母さんは、髪をセットし、マニュキュアをしたとても美しい方でしたが残念ながら病気で思うように体を動かせない、思うようにしゃべれないという状態でした。でも日本から持って来たアルバムを見ながら笑ったり、一緒に写真を撮ったりと充分に楽しい時間を過ごすことができました。子供達のおばあさんに対する思いやりも感じられ、家族の大切さ、温かさを再認識することができました。

夜になり、子供達は眠り、マイクとスザーンと私の3人の時間になりました。

マイクがためらいがちに「昔、第2次世界大戦の時、スザーンのお父さんは空軍で日本を攻撃に行った。その時、仲間達と何千枚もの紙に何かを印刷して日本の空にばら撒いた。私はそれと同じものをもらって大切にもっているんだが、日本語なので何を書いているのかわからない。もしかしたら、悪いことが書かれてあるかもしれないけれど、気にしないで読んで私に訳してくれないか。」と言って来ました。私はその紙に書かれているものを読みながら体が震え、鳥肌が立ってくるのがわかりました。それはもちろん怒りからではなく、戦争という状況の中で、軍からの指示でもなく、仲間達の中で、こういった行動ができるアメリカ人の偉大さに心が震えたからでした。その紙の内容は、以下のコピーの通りです。私はすべてをマイクに伝えることはできませんでしたが、マイクは「よかったよ。」と何度も胸をなでおろすしぐさをしてくれました。私がこのコピーがほしいというと、「僕はあと2枚もっているから、これをあげるよ。」と言ってくれました。

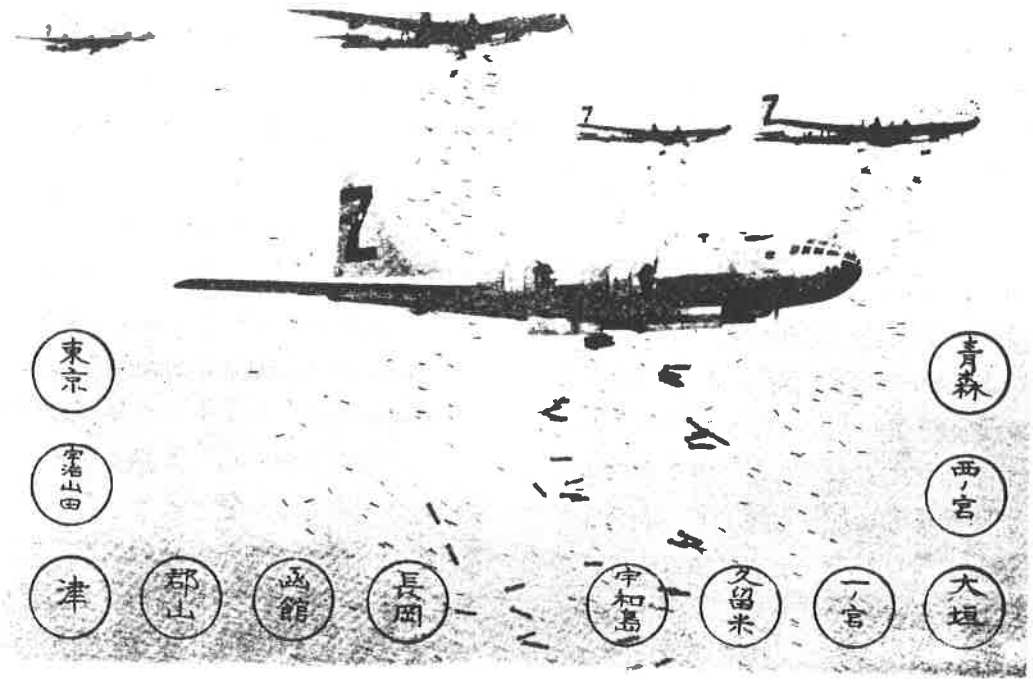
こうして今、手元にあるこの紙は、私の宝物です。（次頁参照）

今日も流れてくるアメリカのニュースは暗いものが中心です。でも、まだまだアメリカには、リンチ家の人達やセント・ピータースバーグの人達のように、本当の強さと、本当のやさしさをもった人々がたくさんいるのです！

短い日程ではありましたが、多くのすばらしい人と出会えるチャンスに恵まれ、心を震わせた本当に貴重な旅でした。そしてこの旅を陰でサポートしてくれたキャシーさん、安希子さん、酒生さん等日系アメリカ人の方々、彼女達の親身でパワフルなサポートに、本当に感謝致します。そしてマイクの「僕達は強いフレンドシップで結ばれたよ！」という言葉が、あちこちで聞こえるように、私もキャシーさん達のような活動ができればと思っています。

日本國民に告ぐ

下にするんく す樹るれないすつあらで人人ちは全か部品米つん助命
さ書孫都がてこかて戦んばたふア張りア避す達道る眼部せがをこ空か數でけをあ
いいめ市少もの て爭でも方のメりまメ難かを主かが破るこ製の軍五日下た助な
て注のく爆裏平をすつをはり込せりしら傷義分あ壞爲の造都はののさけけた
あ意内と撃に和止と解たカんんカて裏つのりりしに勝す市爆都内いれよは
るし必もさ書をめよ放ゞのであの下にけアままま使目るに撃市にばう自
都てずこれい恢るいす軍考ゐな敵さ書たメせせすふのエはしに裏こと分
市おき四のるて復様新る部へるたはいいくりんんけ兵な場軍まあ面のはや
かきっ裏かあしな日事のて軍方あてはカ御かれ器いが事するのビ思親
らまはにもるた新本で壓ゐ部をなああは承らどを戦あ施軍都ラひ兄
避すか爆書知都ら指がす迫るこ戦たるり罪知ども米爭り設事市をま弟
難撃いれ市ど導出さか平そ爭方都まののこ爆空をまや施のよせ友
しらしてまで う者來うら和敵にで市せな様に彈軍長す軍設内くん達
て裏まあせな でを上すあとで引はかんいに落には引軍需を四請かの



青年訪米親善使節団に参加して

十　鳥　真　理

アメリカは広い！当たり前のことだが今回の旅行で改めて痛感した。街が違えば全くの異国。人も空気も色も多種多様でそれぞれに個性がある。

10日間でロサンゼルス、セント・ピータースバーグ、オーランド、アトランタ、ニューヨークとまわったわけだが、どの街も魅力的で私たちを温かく迎えてくれた。

その中でも、姉妹都市であるセント・ピータースバーグで過ごした3日間は感慨深い。

ここで、私たちは、市民のボランティアによるホームステイを体験することができた。

私がお世話になったのは、Bogdanさんというご夫婦だけの家庭だ。もとは先生をしていたそうだが、いまは、夫婦水入らずでのんびりとした生活を送っている。息子さんが松山大学の先生をしていたことがあり、日本に対しても高松に対しても、とても関心をもっている家であった。ステイ先が一番の気掛かりであった私にとっては、まずはひと安心……。

夫婦ふたりだけの家ではあったが、ご夫婦ともユーモアにとんだきさくな方でステイ中、笑いが絶えることがなかった。お父さんは、以前日本に来たことがあり、その時覚えた「ショウグン」という日本語を何かにつけて連発して笑わせてくれた。お母さんは、おしゃれな方で、靴が大好き。一日に何回も靴を取り替えては私をびっくりさせた。

ステイ中、さまざまな所に連れていってくれたが、お母さんと夕暮れの町の中をいろんな話をしながら歩いたことが印象深く心に残っている。

そして、何よりもありがたかったことは、私を特別扱いせず家族の一員としてありのまま受け入れてくれたことであった。日本だとお客さんが来るというだけでかし

オレンジを取っている私

こまり、おもてなしについて悩んだりするが、アメリカではあくまでも自然体である。このような受け入れ側の姿勢はこのホームステイで一番学んだことであったように思う。

また、貿易摩擦による日本たたきが叫ばれる中で、行く前はどうなることやらと心配したが、セ市ではいたって平凡で日本に対して友好的であったように感じた。ステイ先でも2台ある車は全て日本車。お母さんは「いいものはいいのよ。」と言っていたので、私はホッとした。

ホームステイの話題は尽きないが、素晴らしい思い出をたくさん与えてくれたBogdanさんには感謝の気持ちで一杯である。

特に、セント・ピータースバーグ市では、3日間のホームステイがあり、生活を通じて市民との交流ができ、両市の友好親善を深めるとともに、今まで知らなかったアメリカに触れることができたように思う。

ところで、今回の海外派遣は、私にとって地域の国際交流に役立つために私自身何ができるか、ということについてずいぶん考えさせられた。国境にとらわれず、地球規模で物事を考えていくなかで、高松というほんの小さな町だけれども、これを機会にこの町の国際交流に少しでも役立っていきたいと思う。

また、それぞれに違う職業を持ったメンバーと一つのチームになって行動し、社会人として国際交流という形で地域活動に参加できたことも意義深いことであった。

最後に、この旅行の機会を与えてくださった皆様とメンバーのみんなに感謝申し上げます。

お父さんは「ショウグン」と言って
このポーズをとりました。

訪米親善使節団員としての旅を終えて

福　田　有　紀

常々、旅を単なる観光で終わらせたくないと考えている私にとって、今回“訪米親善使節団員”として姉妹都市を訪れることができたのは、本当に幸運なことであった。姉妹都市でホームステイができる機会などそう多くはないだろう。普通、市民の多くは、姉妹都市というものを名前の上だけでしか知らないのではないか。事実私自身がそうであった。しかし、実際に訪れると、その友好の深さに驚き、この素晴らしい交流をいつまでも続けていかなくてはならない、と心から思う。それは市のレベルでだけでなく、市民のレベルでもである。できるだけ多くの市民が関わっていくことを、望まずにはいられない。

さて、この旅の目標として私は、ホームステイでの生活と、アメリカにおける日本の観察、という２つをあげていた。ホームステイでは、第１に心の交流の実現、第２に夫婦間の役割等の観察、第３にホームステイのあり方の研究、以上の３点を目標としていた。第１の目標の心の交流は、英語は全く不十分なものであったが、双方の一生懸命伝えようとする気持ち、理解しようとする気持ちにより、十分に実現できたと思っている。聞きたい、伝えたいと思うことは、言葉がうまく見つからなくても、態度で示し何度も挑戦した。そして多くのことを語り合うことができた。人間関係の基本は、言葉を越えて思いやりや相手を尊重し合う気持ちである、と痛感している。第２の点の夫婦間の役割は、大変興味深いものであった。私のホストファミリーは所謂「DINKS 」と呼ばれる家庭であった。39才のボブと31才のモニカ。６年前に結婚した彼らは、全く対等な人間関係をもっていた。どちらかが、少々オーバーな表現だが、“犠牲”になることは考えられない。料理好きのボブは週末になると腕を奮う。仕事を持つモニカはボブよりも早く出かけ一生懸命働く。２人とも個人の趣味と共通の趣味を持ち、ウィークデー、そしてウィークエンドに楽しむ。全く自然で、男だから、女だからという気負いがない。もちろん細かいところで男女の区別はあるであろう。しかしながら、家事・仕事・遊びを通して、自然体でいられる彼らは生き生きとしてうらやましい程だ。第

ブッシュガーデンにて

３にホームステイのあり方であるが、一番うれしかったのは、ありのままの姿で接してくれたことである。とかく日本人は客が来ると畏まり、普段以上の生活を見せようとしがちだと思う。がそれよりも、家族の一員として接してくれる方がどんなにうれしいか、そして、どんなに意味のあることか実感できた。これらのことを学べたホームステイは、３日間という短い時間ではあったが、本当に貴重なものになったと自負している。

「恋におちて」を熱唱 !?

また、10日間の旅を通して、アメリカや日本について自分なりに考える機会が持てたと思う。アメリカは私の憧れの国である。広大で自由で陽気で前向きで－だけどそれは光の部分といってよいだろう。光が強ければ強い程、また影も濃くなる。サンタモニカでの眩いばかりの光と陽気な人々。その影でホームレスの人々が蠢く。ＮＹの華やかなビル街の影で一般の人は近づけない危険な場所（ハーレムではバスに石を投げられてしまった）の存在。幾面をも見つめていかなければ、他国を本当に理解することはできない。そんなアメリカの中での日本。これもとても一言では言い切れないものだと思う。私の出会った人は皆親切で、日本にも好意をもってくれていた。街は日本車や日本製品であふれ、よい製品だと誉めてくれる。反日感情なんてどこにも見当たらないではないか、と思いきや、ブロードウェイのミュージカルの中で、日本人観光客を揶揄する台詞をきき、イヤな気持ちに陥ってしまった。こんな所で日本人を悪く言う－一般受けするからであろうし、またそう思っていない人にまで少なからず影響を与えてしまうと思う。やはり日米関係は複雑で、とても一言では言えないものなのだろう。ただ、今回到底その答えなど見つけることはできなかったけれども、この様に自分自身で－マスコミに左右されることなく－その関係を探っていけたらと思う。少しずつでも自分なりの理解をしていきたい。

以上、自分の目標にそって今回の旅を振り返ってみたが、今改めてこの旅を10日間だけの旅にしたくないと思っている。ここで得たことを今後あらゆる方面－募集時に書いた国際交流活動をはじめ、自分自身の生き方にまで－に生かしていきたい。この旅の成功は、これからの私自身の生活に大きくかかっているといえるのだろう。胸一杯の思い出を大切に、自分なりに精一杯生きていくつもりだ。

最後になりましたが、ご尽力いただいた関係者の皆様、そして、この旅を共にした友人達に心からお礼を述べたいと思います。本当に有難うございました。

青年の海外派遣事業に思うこと

事務局　加藤浩三

ユネスコ憲章前文要旨――「相互の風習と生活を知らないことが世界の人々の間に疑惑と不信を招き、それが戦争の原因となっていた。」

1965年国際連合、諸国民間の平和・相互尊敬および理解を青少年の間に普及することに関する宣言前文――「人類の活動のすべての分野で、青少年が重要な役割を演じていること、および青少年が人類の運命を導くものであることを心に銘じ（中略）さらに、諸国民間の平和・相互尊敬及び理解の精神に基づく青少年の教育と、青少年及び思想の交流は国際関係を改善し、平和と安全保障を強めるのに役立つことを確信し……（後略）……」

○青年期には、人間形成、引いては人類の将来のために重要な創造性、責任感、思いやりなどを自覚すべく、自主性をもった体験をすることが必要。

○国（風習、生活、文化etc.）の違いと同じ人間どうしという認識が必要。

以上の２点は、昨年度、市制施行100周年記念として、高松市青年海外親善使節の米仏両国への派遣事業を担当した際、事業の意義として認識していたことであり、今回の訪米派遣においても意識して取り組みました。結果、この意義を再認識させられたというのが実感です。

地域性、国民性により、風習、生活スタイルは異なって当然であり、相互に尊重し、干渉すべきではありません。しかし、多国籍企業、ＥＣ統合などにみられるように経済的には国境がなくなりつつあり、また政治的にも相互関係が深まっている今日、干渉しないだけではすまされません。経済的、政治的にはもとより、国民間の相互尊敬および理解が必要となってきています。

即ち、外国の人々の風習や生活やものの考え方を知り、相手の立場に立って物事の判断ができるような広い視野と国際性を身につけること、そして自分の国のことを理解してもらう努力をすることが求められています。

特に、人類の次代を担い、将来を導く青年には、その柔軟な感性をもって「百聞は一見にしかず」にとどまらず、自分の目で、耳で何かを感じとり、考え、また伝えること、そのために受け身の姿勢ではなく、能動的に見、聞き、そして言葉の壁を乗り越えて人と人の対話をもつことが望まれています。

そうすることで多くの誤解や間違った認識が解かれていき、国際交流は、その青年達が国を、人類を背負って立つ時代にさらに開花し、その青年達が育て、導く子孫へとつながっていくことと思います。このことは、国際連合の宣言以後、

国際間の青少年交流が活発になり、30年近く経った現在、当時の青年が指導的立場となり様々の国際交流が実践されていることからも明らかではないでしょうか。

今回の事業も、そうした目的をもち、また青年団員も自覚をもって参加しました。そのため、主催者側が設けた事前研修に頼らず、すべきことを自ら考え、摸索し、あるときは主催者側に求めるような自主性を大切にしました。そうすることで、仲間意識も芽生えてきたように思います。ただ、先にも述べた青年期の団体活動は重要であり、団体活動を、それも対外的要素が中心の団体活動をするためには、事前の一人一人の自覚と団としてのまとまりが必要ですが、出発までの時間的制約がきつく、余裕があまりなかったため準備に追われ、その弊害が帰国後余裕がでるまで尾を引いた面もあり、主催者側として考える必要があると感じました。

訪米中、特に姉妹都市セント・ピータースバーグ市では、団員一同すばらしい経験ができました。セント・ピータースバーグ市については過去に多くの訪問者が述べられていますので説明は避けますが、伝え聞いていたとおり人も街もゆったりとして、やさしく美しいものでした。確かに、気候風土の良さも手伝ってか高齢者が多く、青年どうしの交流は難しいところもありますが、異質のものに触れ、感じとること、感じとれる時期に行うことこそ重要であり、また、違った年代の方と接することは、日本人どうしでも少なくなってきている今日においては貴重な体験であると思います。

特に、セント・ピータースバーグ市でお世話になったキャシーさんたちをはじめ、ガイドの方など出会った日系の人たちが本当に活き活きと、そして今日の情勢（反日感情の高まり）に気をつかいながらも逞しく生きておられるのに接し、熱いものを感じずにはいられませんでした。本当にありがとうございました。

この出会いは私たちに、このような機会を与えていただいたすべての人に感謝を忘れず、この貴重な経験を生かして国際交流という言葉が発展的死語になるよう人間交流をすすめていかなければならないと、強く思わせてくれました。

セント・ピータースバーグ市滞在中、親切に応接していただいたコニー・コーン副市長さん、国際交流担当のバージニア・ローエルさんをはじめ市当局の方、ボランティアで快く受け入れてくださったホストファミリーの皆さん、そして事前準備からお世話いただいたキャシー・プランタムラさん、安希子・ウォールズさん、カニー・酒生さんほか多くの市民の皆さん、また他の訪問都市で丁寧にガイドしてくださった方々に心から感謝いたしますとともに、使節団の訪米を支えていただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。

■ ホームステイ日記

原　田　義　信

（ホストファミリー）

ノートン家

ゴートン、ケイ夫妻

○　ホストファミリーとの対面時、私は内心若干の不安を感じていたが、やはりここはアメリカ、いきなり握手され連れ去られた（？）時はア然という感じだった。その日は、夕食後、長男ブルースの彼女と友人３人でパーティを開いてくれた。彼女達は、日本からの訪問者を不思議そうに眺めていたが、私が、日本の話、高松の紹介、自己紹介をすると、それから段々と話が弾んだ。それでつい私も、写真を見せながら彼女の話などを沢山してしまった!!

○　日曜日は、ノートンさんのいつもの生活どおり（私がそうお願いした）、朝は教会へ出かけた。セント・ピータースバーグの中心にある大きな教会で、ここでは私はノートンさんが講師をしている若い人達の教室に入らせていただいた。内容は難しかったが、ボランティアについての話の様だった。最後にホールに集合し、聖歌を歌ったり話を聞いたりしたが、その時に初めての人と友達になれるような配慮がされており、私の中の教会のイメージが変わった。

○　私は、どうしてもＵＳＡ製のテニスシューズが欲しくて、ノートン夫人にお願いしてショッピングモールに連れていってもらい、歩き回って捜したがついに見つけることができなかった。ショックを受けながら、ここも日本と同じだと思った。

○　別れの日、朝食後ノートンさんは、カードを２枚私に手渡した。そこには、３日間の楽しかった事と私への感謝の言葉が記されていた。私も日本から持っていった和紙にメッセージを残してきた。このホームステイを通じ、日本とアメリカの生活習慣の違いを感じたが、日本としても、私個人としても見習うことは多いと思った。３日間、今迄自分の中にあったのとは別のアメリカを見て、感じて、本当に貴重な体験となった。

請 川 勘 次

（ホストファミリー）

ヨハンセン家

ロイ、ジェニー夫妻

ケイティ　（5才）

アレックス（4才）

○　ホストファミリーに会うまでは、英語が通じなくて困るのではないかと心配していたが、相手が簡単な単語を使ってくれたことやこちらが文法にこだわらず積極的に話かけたこともあって殆ど通じた。そして、言葉よりも真心があれば誠意や心遣いといった大切なことも伝わるものだ。しかし・・・私は、ステイ中2晩続けて英語の夢を見てしまった（もっとも内容は皆目分からない）。

○　日曜日は、午前中は教会と中古車センターへ行き、昼食後はタンパ動物園まで足を伸ばした。車の中でジェニーが「動物園といっても小さいのよ。」と言ったので栗林動物園くらいかと思っていたところ、そこには世界中の動物がいるばかりか水族館、野鳥コーナー、遊園地まであって想像以上の大きさに驚いた。彼らがいつか高松に来る時、間違っても白鳥動物園には連れて行くまいとこの時思った。

○　一日目の夜、シャワーを浴びようとしたら水しか出てこない。風呂場から叫ぶ訳にもいかずそのまま水を浴びた。風呂から出ると、ロイ曰く「すまない。お湯の準備が出来ていなかったんだ。」そして2日目、今度はちゃんとお湯が出たので喜んだが、体を洗おうとすると、これが突然水に変わった。この日も我慢して水を浴び、理由を聞き損ねたまま最終日を迎えたら、案の定また冷たいシャワーが待っていた。

○　市役所を表敬訪問する日の朝、ジェニーに車で集合場所まで送ってもらったが、その途中、市長へ贈るために日本から持ってきた木目込み人形「秋篠」を家に忘れたことに気付き大いに慌てた。引き返している時間はなかった。ジェニーは、“Don't worry. Be happy.”と言って私の肩を叩き、私を送り届けたあとでその人形を取りに帰って市役所へ直接持ってきてくれた。私はこの時のジェニーの言葉を一生忘れないだろう。この言葉を別れの場面でジェニーの口からもう一度聞いた時は柄にもなくセンチメンタルな気分になり言葉が詰まってしまった。

内　海　志穂子

（ホストファミリー）
　メリカン家
　　ジェニファー・メリカン
　　ジェニファーのお父さん
　　お母さん
　　ネコ２匹

○　ステイ中、いろいろと珍しいところへ連れて行ってもらった。まず、到着した日は夕食後に、ジェニファーのお母さんが館長をなさっている図書館を見学。展示物や図書館の歴史がわかる写真を見せてくれた。そして、２日目、すっかり朝寝坊してしまい、11時頃家を出発。最初に行ったショッピングモールではバスケットシューズ、Ｔシャツ、アメリカの有名大学フットボールチームのトレーナー、エアロビクスのダンシングウェアーなどを買う（後々荷物の整理に苦労する）。午後からは、傷ついた鳥を保護する病院を見学し、いろいろな鳥を見た。勿論、ペリカンが一番多かった。そのあと、ジェニファーの伯母さんも住んでいるという移動式の家（床下に車が付いている）の集落を訪ねる。これは気軽にどこへでも家をトラックで引っ張っていってもらえるのだが、フロリダが一番住みやすいということですっかり固定してしまっているとのことだった。

○　食事については美味しかったし、随分気を遣って下さって、如何にもアメリカを感じさせるものばかり出して下さったが、高カロリーのものばかりで毎日あのようなメニューで太らないのか心配になった。

○　広くて大きなお家、隣家の境界も塀も無く、みんな大らかで、本当に夢のような３日間だった。ジェニファーとは同じ年頃だったので打ち解けていろいろな話もできた。アメリカで素敵な友達が出来たことがとても嬉しい。学生時代のこと、仕事のこと、恋愛や結婚のこと、お洒落のこと、音楽、政治問題、旅行のことなどお喋りの種は尽きず、別れるのが名残惜しかった。

○　出来れば、もっとホームステイの期間が長ければ良いと思った。平日で皆仕事があるからご迷惑になるというのであれば、昼間は団員で親善使節としての訪問などをし、夜だけステイするという形式でもよいのではないか。

上　　ゆかり

（ホストファミリー）

パーカー家

ドナルド（パパ）

デニス　（ママ）

ピエール（息子さん）

○　私のホストファミリーの家はセント・ピータースバーグの隣の街ラーゴにあり、それは静かな住宅地の広大な敷地の中に建っていた。案内された私の部屋はおとぎ話の世界に出てくるようなとてもファンタジックな部屋で、クローゼットも私のスペースを作っていてくれて、とても感激した。家中のあちらこちらに家族の写真を飾っているところに家族への思いやりが感じられて羨ましくもあった。

○　家族の写真、ボーイフレンドの写真など必要なのが分かっていながら荷造りの忙しさにかまけて結局持っていくのを忘れてしまい、ホストファミリーの人達をガッカリさせてしまった。最初の会話の糸口にもなる家族の写真などをまとめたミニアルバムは絶対に必要だと思う。

○　市役所表敬訪問の日、集合時間は８時30分だったにも拘らず、ママは９時集合だと主張。８時50分にみんなの姿の無い（既に出発した後だった）タイロンガーデンに着いた瞬間、ママはこう言った。「やったわ！ほら、ユカリが一番よ！……」

○　私にとって初めてのホームステイが、こんなに楽しく終わるとは思っていなかった。対面の時、バスから降り立った私を見て「あの子が私達の家に来る子だといいわ。」と言ってくれたデニスさん。庭のグレープフルーツやオレンジをちぎらせてくれた素敵な声のドナルドさん。ディスコやバー、ビーチバレーにパットゴルフ、その他いろいろな所へ連れていってくれて会う友達みんなに私の事を紹介してくれたピエール。思い通りに言葉が通じずイライラすることも何度かあったけれど、私の話す片言の英語を一生懸命に理解しようとしてくれて、また、私の解らない言葉は一番簡単な単語を選んで説明してくれたホストファミリーの皆さんの優しさに心から感謝している。私の心のアルバムの大切な一ページ・・。機会があれば、また行きたい！

唐渡　　進

（ホストファミリー）

ベント家

バーサ・ベントさん

ジョン（息子さん・27才）

○　一日目の夜、ご夫婦で友好太鼓をたたいているロレインさん宅へ招かれる。何回か日本で友好太鼓のパフォーマンスをされたそうで（土佐の山田太鼓とも友好関係）、日本語も上手でとても楽しいご家庭だった。

○　日曜日は、ジョン君の車（ハイウェイでの運転がちょっと怖かった）でオーランドのディズニーワールドへ。彼の案内で休日にも拘らず、地元の人と同じ遊び方でディズニーワールドを堪能した。朝9時に出発して帰ってきたのはなんと夜10時。今回ディズニーの偉大さに気付き、東京ディズニーランドにも通おうと決意！

○　ベントさんは、お年のわりに若々しく元気に生活されており、私もステイ中、大変健康的な生活を経験させていただいた。日本のご老人達にも是非こうあっていただきたいものだと思った。

○　結局、オーランドのDyワールドで2日間で4回スペース・マウンテンに乗ったら、自由に恐怖心がcleanできるようになった。今でも緊張すると「Dy」「FLORIDA」と考えるようにしている。

工　代　裕美子

（ホストファミリー）

クニッペン家

ジェフ、ジョーン夫妻

ジェナ（7才）

カラー（1才半）

犬3匹

○　ホストファミリーと対面した後、そのままレストランへ直行。巨大なサラダとパンを囲み、フランクな雰囲気の中で話の花が咲いた。それまでの緊張と不安がここで一気に解消してしまう。そして、1才のカラーが自分でパンをちぎりマヨネーズをつけては口に運んでいる様子にすっかり感心し、いとおしさが込上げてきた。それにしても変な時間（夕方の5時前）におやつを食べるんだなあと不思議に思いつつ・・。私が、あれこそが夕食だったのだと気付くまでには、その後数時間を要した。

○　日曜日、ジョーンは朝早く出勤（彼女は週末のみジェフと同じ病院に勤務している）。私は、ジェフに普段通りの生活をしてくれるようお願いした。まず、ジェフ、ジェナ、カラーと近くのスーパーへ。その後、セント・ピータースバーグの南端にあるという公園に遊びに行った。ビーチの前に広い芝生が広がり、絵を描いたような美しさ。こんな所で子育てできるなんて本当に羨ましい。お昼前には帰宅して、3時にジョーンが帰ってくるまで子供達と遊んだり、ジェフと雑談をしながらテレビを楽しんだりした（テレショップで家を売っていたのには正直驚いた）。何はともあれ、ジェフの家事と育児の腕前は大したもので私としては学ぶところが大であった。夕方からは、クニッペン一族総勢13人で歓迎パーティを開いて下さり、とても楽しい夜となった。

○　3日間という短いホームステイではあったが、自分と年令が近く、ライフスタイルもよく似ている若いご夫婦に受入れていただき、いろいろな意味で勉強になり貴重な経験となった。特に、お二人が、何をするにも肩の力を抜いて悠々と生活を楽しんでいる姿を眼の当りにしたことで、ある意味の大きなショックを受け、そして大いに勇気付けられた。

○　ジェフとジョーンから手作りの美しい額をプレゼントされた。そこには、こう書かれてある。

「There are no strangers here. Only friends we haven't met.」

手に取った瞬間、感動で身体が震えた。今回の素晴らしい思い出とこの限りなく優しい言葉を生涯の宝物としたい。

河　野　直　子

（ホストファミリー）
　リンチ家
　　マイケル（お父さん）
　　スザーン（お母さん）
　　セーラ　（10才）
　　シェーン（８才）
　　シェフ　（４才）

○　私のステイ先は本当に素敵な家族でした。教会に行ったり、ショッピングをしたり、散歩をしたりと特に変わった所へ行った訳でもなく、特にお金持ちという訳でもありませんでしたが、心温まる素晴らしい家族でした。

○　お父さんのマイクはクスコというところに勤めていて、船を操縦し、メキシコから来る難民を助けたりする仕事をしているそうです。家族の大黒柱といった言葉がピッタリの人で、「ダディ」と呼ばれると「ヤッ」と家中どこでもかけつける。ウッドワークも料理も得意で、家事や育児に積極的に参加して、陽気で明るくみんなを楽しませてくれる、強くて優しい理想的なお父さんでした。

「彼女は頭がいいんだよ。本もよく読むし。」とマイクがのろけるお母さんスザーンは大学院を出て図書館で働いていたそうですが子育てのため退職。アメリカの女性は結婚しても子供を生んでもバリバリ働いているのかと思っていたら、意外にもしっかり家庭を守っていてびっくり。「子供に手がかからなくなったらまた働いてお金をためて旅行がしたいわ。」と夢を話してくれたスザーン。きっと高松に来てね！

私をリンチ家に招いてくれたセーラ。教会で讃美歌を歌う時、譜面を一生懸命指で押さえていてくれたこと、私のために自分の部屋を空けてくれたこと、友達や学校、ジュゴンのことを話してくれたこと本当にありがとう。マイクが「Sera yearns you! 」と教えてくれた時はとってもうれしかった。早く高校生になってSt.Pの代表として高松に来てくれることを楽しみにしています！

恥かしがり屋のシェーンは最後までお休みのキスをしてくれませんでした。でも紙風船や折紙、けん玉など、持って行った日本のおもちゃをとても気に入ってくれました。時々は遊びながら私のことを思い出してね。

お人形のようにかわいいシェフはとても私になついてくれました。マイクから「Seth loves you」と言われた時は、あと20年早く生まれててくれれば！と嘆いてしまいました。

○　こんなことを話したい、こんなことをしたい、してあげたいと事前に色々考えていたこと、それに合わせてお土産を持っていったことがうまくいったと思います。

センピではまだまだ見たいものがたくさんありましたし、もう少しホームステイが長くてもよかったと思います。

十 鳥 真 理

（ホストファミリー）

ボグダン家

スタン　　（お父さん）

ジャネット　（お母さん）

デェイビット（息子さん）

○　ホストファミリーとは他のみんなより少し遅れてご対面。お母さん、デェイビット、そして彼のフィアンセの友子さんが迎えにきてくれたが、日本人がいたのにはびっくり！その日はいきなりビーチなどに連れていってくれて、結局ファミリー宅に到着したのは夜の10時だった。

○　日曜日は、お母さんと教会へ行ったあとはジョーンズパスというとても素敵な所へ。ペリカンをあんなに近くで見ることができてびっくりした。お昼は、お母さんお勧めのレストランで海を眺めながら“クラムチャウダー”を食べた。

○　買い物をして帰って来ると、家で待っていたお父さんが、「オレンジとグレープフルーツを裏庭でもぎろう」というので、生まれて初めて木からオレンジとグレープフルーツをもぎることを経験した。

○　夕食後、お母さんが健康の為、毎日Walking しているというのでついていったのはいいが、スピードが早く汗びっしょりになった。夜はお父さんお勧めのビデオ「Rain man」や子供たちの古いビデオを見ながら話が弾んだ。

福　田　有　紀

（ホストファミリー）

ビューコス家

ボブ、モニカ夫妻

猫のマーリー

○　一日目の夜、ボブの友人宅へ行き2家庭と小さなホームパーティをする。その中に6才の女の子がいて、お土産の紙風船、千代紙などをあげたらすごく喜んでくれた。パーティでは高松や日本のことをいろいろ聞かれた。

○　日曜日は、7時半に目覚しをセットしていたのに夢の世界で長居しすぎて9時過ぎに起床。朝食後、ブッシュガーデンに行き夕方まで遊ぶ。そこは動物園と遊園地、バドワイザー記念館が一緒になったところだ。動物はワニ、ホワイトタイガー、コアラ等変わったものもいて楽しめた。乗り物も面白いのが沢山あったが、中でも“River rapids”にはびっくり！多少は覚悟していたものの、なんと全身ずぶ濡れになるのである。アメリカはすることがハデだわ…と思わず苦笑。

○　音楽好きのボブと私は趣味がピッタリ一致。日本から練習していった小林明子の「恋におちて」をステイ中さらに練習。私の弾き語りを録音しさらにその上にボブがベースとドラムを調整して一つのテープを作りあげようと試みた。また、ボブは最終日の夜中までかかって私にプレゼントしてくれるテープを作ってくれた。感激！

○　日本語に興味を持っているボブとモニカに、得意の（当り前か…）日本語を教えてあげて少々優越感に浸る？名前を漢字やひらがな、カタカナで書くと不思議がっていた。

○　とにもかくにもこの3日間は本当に貴重な経験で、私にとってかけがえのない思い出となった。異国の地で、全く見ず知らずの人と暮らす。こんな経験は決してお金で買えないものだと思う。これからも私の財産としてずっと大切にしていきたい。そして、いつの日かまた私の第二の家族を訪れたい。

エピソード

・請川さん、セント・ピータースバーグ市役所訪問の日の集合時、市長に手渡すはずの「秋篠」を忘れて大あわて。でも、ホストファミリーが後で市役所まで届けてくれて、何とかすべり込みセーフ。

・市役所表敬訪問の朝、上さんのホストファミリーは朝の集合時間を９：00と思い込んでいた。既に他の団員が出発した後のタイロン・ガーデンに到着した瞬間、お母さん曰く「ゆかり、よかったわね、あなたが一番よ！」……

・市役所市長室の飾り棚に、前回（百周年時）の使節団が贈呈した、讃岐一刃彫が飾られていたのを見て、一同感激。その他高松からの贈りものがいろいろありました。

・工代さん、老人ホーム訪問時に大切な手帳を落とす。親切なバスの運転手さんが一緒に捜してくださる。手帳は大きな水たまりのすぐ横に落ちていた。

・サンコースト・ドーム見学時、私達をカメラに撮っている男性がいると思ったら、翌朝この時の様子が、地元紙セント・ピータースバーグタイムスに掲載される。やった！（しかも一面トップ）

・ホストファミリーとの別れの場面で、キャシーさんが、ティッシュの箱を用意してくださっており、女性団員は大泣きで涙をふくのに大助かり。（さすが用意万端…）

・ディズニーワールド内のホットドッグショップで、ミッキーマウスのナプキンが、とてもかわいいので、たくさんもって帰ってきてしまった。（そんなもん、どうするんだ？）

・オーランド空港内に、唐渡さんとうりふたつの人がいて、勝美さんが「唐渡さ～ん」と呼びかけたのが、大うけした。世の中には、似た人がいるものだ！

・アトランタでの夕食時、ディナーのステーキが強烈、限りなく生に近く、厚く大きな肉片からは血がしたたり、どうしても食べきれない団員たちは、牛肉の輸入自由化問題について、語りあった。

・またこの時、魚を注文した加藤さんは、ピラニアのような謎の魚を見事に、ビールで流しこみ、このころから体調を崩し始めた。

- 唐渡さん、N.Y.に着くなりバスの中をカメラを持って動きまわり、精力的に写真を撮りまくる。（唐渡さん、N.Y.にきて、かなり興奮ぎみになっている。）
- N.Y.にて、ウエイトレスがコップを倒して十鳥さんのセーターを濡らしてしまう。ウエイトレスのあまりの対応の悪さにみんな激怒。結局、マネージャーらしき女性がやってきて、十鳥さんのセーターを乾かしてもらう。（どうやって乾かしたのだろう？）
- ブロードウェイにミュージカルを見に行った時のこと。開演前に、唐渡さんがみんなを指して「見てろよ、みんなどうせ始まったら、すぐ寝るぜ。」と、鼻で笑っていたが、開演5分後には、その本人が寝ていた。（しかも、例のいびきと歯ぎしりで、まわりのひんしゅくを買っていた。）
- ミュージカル終了後、タクシーに分乗して帰ることになったが、添乗員の勝見さん、上さん、河野さんのグループとそれ以外のメンバーが、劇場外ではぐれてしまう。お互い捜し回ったが、人ゴミの中見つからず、めいめいでタクシーを拾って、ホテルに帰る。勝見さんは、先にホテルに着いてロビーでオロオロ。無事みんなホテルにたどり着いたが、やはり、団体行動でははぐれないよう全員気をつけましょう。
- 福田さん、機内での夕食時寝過ごしたため、ビジネスクラスのディナーを食べれることになる。
- 成田空港にて。唐渡さん、税関でその容貌からか（？）唯一人スーツケースを開けさせられる。
- セント・ピータースバーグには「ビーチの砂が一度足に入ると、その人は何度もやって来る。」という言い伝えがあるとか。私達もいつの日か、また訪れる機会がありますように。

お世話になった方々

セント・ピータースバーグ滞在中お世話になりました。
左からキャシーさん、節子さん、そしてセント・ピータースバーグ市役所のバージニア・ローエルさんです。

セント・ピータースバーグにて、バスの中で英語のレッスンまでして下さいました。
左から安希子さん、キャシーさんです。

いよいよセント・ピータースバーグともお別れ。
見送りに来て下さったのは交歓会でお世話になった酒生さん（後列中央のご婦人）、前列右端はツアーガイドのＪＴＢの勝見さん。

セント・ピータースバーグの美しい海をバックに。
左からビル・プランタムラさん（キャシーさんのご主人）、キャシーさん、勝見さん。

右側の男性がロサンゼルスを案内して下さった門松さんです。

アトランタでガイドして下さったよう子さん。
独特のスーパーボイスとガイダンスで私達を魅了してくれました。

☆その他、ここにご紹介できなかった大勢の方々に大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。